

## 小学校教員の英語音声学トピックへの関心度 —平成 29 年度および平成 30 年度岩手大学免許法認定講習より—

犬塚 博彦

### 1. はじめに

岩手大学教育学部では、小学校における英語教科化を視野に入れて、平成 28 年度から 3 年間の計画で、中学校英語二種免許取得を目ざす小学校教員を対象にした免許法認定講習を実施した。英語音声学の領域では 3 科目（科目名：英語音声学 A, B, C）を設定し、各年度に 1 科目ずつ開設することで 3 年かけて一通りの基礎が学べるような位置づけとした。それぞれの科目は、90 分授業で計 8 回、連続 2 日間にわたる集中講義の形で行われた。

このうち平成 28 年度の「英語音声学 A」は、英語を母語とする本学の専任教員による授業で、日本人学習者に向けて英語母語話者の視点からの音声学が展開された。一方、平成 29 年度「英語音声学 B」と平成 30 年度「英語音声学 C」は筆者が担当し、日本語母語話者の視点から、日英両言語の音構造の違いを理解したうえで、英語を英語らしくうまく発音するコツを身につけるということに主眼を置いた英語音声学講義を展開した。

本稿は、筆者が担当した平成 29 年度「英語音声学 B」と平成 30 年度「英語音声学 C」のそれぞれの講義の最後の時間に受講者に書いていただいた「振り返り」記録から、現職小学校教員の英語音声学トピックへの関心度を分析し、その背景について考察を加えたものである。

### 2. 実施の概要

「英語音声学 B」は平成 29 年 12 月 16 日（土）と 17 日（日）の二日間、「英語音声学 C」は平成 30 年 11 月 24 日（土）と 25 日（日）の二日間、それぞれの科目で計 16 時間（90 分授業で計 8 回）、岩手大学教育学部において集中講義の形で実施された。

このうち、「英語音声学 B」受講者は計 28 名、その勤務地は岩手県内が 26 名と大半を占め、県外からは青森県 1 名、宮城県 1 名であった。また、「英語音声学 C」については、受講者数が計 33 名、その勤務地は 29 名が岩手県内、県外については、青森県から 2 名、宮城県から 2 名の受講があった。受講者はいずれもすべて現職小学校教員で、筆者の「英語音声学 B」と「英語音声学 C」の両科目を受講した人が 22 名いた。

### 3. 免許法認定講習「英語音声学」について

#### 3. 1 講義展開の構想

免許法認定講習での講義を展開するにあたっては、犬塚(2018)においても言及したとおり、大学で行われる通常の講義と異なるため、次の点を考慮しなくてはならなかった。すなわち、「(1) 現職の小学校教員を対象とするのであって、大学生を対象とするものではないこと、(2) その多くは学生時代に英語専攻ではなかった人たちを対象とするものであること、(3) 集中講義でしかも講義時間が限られていること」(犬塚 2018: 35)である。

小学校英語教育において、とりわけ音声指導の場面で留意すべき点は、教師が子どもたちに発音のしかたを理屈でもって理解させようとしても、6~12歳という年齢を考えた場合、そもそも無理な話であるということである。仮にそんなことをしたら子どもたちに英語の発音は難しいという誤った印象を与えてしまい、却って英語嫌いを生み出してしまうことになりかねない。英語の音声指導における究極の目標は、子どもたちの英語の発音がうまくなることである。これに尽きる。そのためには、担当する教師がみずから正しい発音で子どもたちの前でお手本として示せるようになればそれが一番の近道である。子どもたちは目の前の教師の発音を理屈抜きで忠実にまねしようと試みるからである。以上のことを踏まえて、筆者は本講習の目的を以下のように設定した。

#### 《本講習の目的》

「ネイティブスピーカーの話す英語は、なぜ英語らしく聞こえるのか？ 英語を英語らしくうまく発音するコツはどこにあるのか？ について、英語の音声上の特徴を日本語の場合と比較しながら学んでいきます。英語の音声と日本語の音声について“違いのわかる人”になることを目指します。」

つまり、本講習では英語でのコミュニケーションに資するために必要な音声理解と発音練習に主眼を置いた英語音声学にすることにした。

そこで筆者の音声学担当としては1年めとなる平成29年度「英語音声学 B」を「基礎編」として、2年めとなる平成30年度「英語音声学 C」を「発展編」と位置づけた。

「基礎編」つまり平成29年度「英語音声学 B」のほうは、総論として音声器官のしくみや母音と子音を分類するときの視点などを概説したあとは、各論として、個々の母音や子音のそれぞれの調音のしくみと発音のコツ、そしてそれぞれの音声について日本語の類似音との差異に焦点をあてて取り扱うことにした。講

習で取り上げる項目としては、竹林滋他 (2008) (『新装版 英語音声学入門』大修館書店) の第 II 章「音声器官と音の分類」、第 III 章「母音」、第 IV 章「子音」、第 V 章「音の連続」(pp.7-151)までとし、各セクションに関連する ‘Exercise’ ‘Comparison’ の CD 音声を発音練習用に利用させていただいた。

なお、講習では、音声学の専門用語を使用することは必要最小限に抑えることとした。受講者たちに英語音声学は難しいという印象を持たれてしまうのを避けるためである。その代わり、発音のしくみについて、口の中のどの部分をどのように動かしたらいいかということ、できる限り易しい日本語表現で言い換えて説明することとした。その際、筆者が読み上げるその説明の言葉を受講者たちにはそのまま一斉にノートに筆記してもらうことにし、講習後に自力で英語音声の勉強を進めていく際に活用できる資料となるように配慮した。

一方で「発展編」つまり平成 30 年度「英語音声学 C」のほうは、前年度実施の「英語音声学 B」での個々の音声に関する学習項目を踏まえた上で、‘強勢’とイントネーションを重点的に取り扱うことにした。いま、‘強勢’(stress)という用語を用い、‘アクセント’(accent)という用語を使わなかったことについて以下の事情が背景にあることを付言しておきたい。すなわち、‘アクセント’という言い方はわが国の英語教育界では馴染みの深い言い方であって、英語教科書や英和辞典での表記では主として 3 段階のアクセントの方式が採用されてきている。つまり、第一アクセント(primary accent)・第二アクセント(secondary accent)・弱アクセント(weak accent)の 3 段階に分ける方式である。ところで、もう一つの方法として 4 段階方式があり、第一強勢(primary stress)・第二強勢(secondary stress)・第三強勢(tertiary stress)・弱強勢(weak stress)がそれである。竹林(1996: 412)によると、ピッチ変動の関与の有無が 3 段階方式では反映されないのに対し、4 段階方式ではそれを踏まえて示すことが可能となる。本講習では、英語音声の実際をより忠実に反映した 4 段階方式を採用した教材を扱うこととし、Sheeler (1967a) (*Stress and Intonation, Part 1*, Macmillan) を選定することにした。この教材付属の音声資料は、‘Exercise’ や ‘Drill’ に掲載された英語表現の音声だけでなく、英語で書かれた本文の解説文もまた英語音声で収録されているので、講習では内容把握のリスニング教材の役割も兼ねていた。講習では Sheeler (1967a) の第 1 章から第 8 章(pp.1-71)まで、具体的には、Word Stress, Word Combination Stress (Major Stress / Minor Stress), Intonation の章を取り扱った。講習では、Sheeler (1967a) に沿って、強勢を 4 段階のピッチレベルと関連づけたルールを、教材中の英文に即して実際の音声を聞いて確認しながらリピートするということを繰り返しつつ、英語音声の背後にあるルールを受講者たち

に体得してもらった。だんだんとルールに慣れてきたら、今度は音声を聞く前に教材中の英文を見て受講者たちに第1強勢・第2強勢・第3強勢・弱強勢のそれぞれを表わす符号を書き込んでもらい、直後に音声を聞いて正しく理解できていたかどうかを確認するというドリル形式の練習を徹底して行った。Sheeler (1967a)が世に出てからかなりの歳月が経過しているが、非英語母語話者に英語の強勢とイントネーションを段階的にマスターさせる教材としては今なお色あせることなく秀逸であり、筆者は講習を展開しながら「教材そのものが持つちから」というものをあらためて実感した。

#### 4. 英語音声学トピックへの関心度調査について

「英語音声学 B・C」の講義は、全体を通して受講者にとって初めて聞くであろうと思われる内容を数多く用意したので、それぞれ2日目の最後の授業時に「振り返り」の時間を設けることにした。具体的には、60分という時間設定をして、受講者にとって新たな学びとなり、かつ特に関心を持ったトピックについて、その内容を講義時に配布された資料や筆記ノート等を参照しながらまとめてもらうことにした。これには、「振り返り」のまとめをしながら受講生がそれぞれ自分の理解を確認していただくという意味合いも込めていた。このほか、各自が考えたことなども自由記述で書いてもらうことにした。なお、トピックをいくつ取りあげるかについてはこちらでは特に指定せず、受講者の判断に任せることにした。

### 5. 調査結果の分析と考察

#### 5. 1 英語音声学 B

##### 5. 1. 1 調査結果

講習で取り上げたトピックを大まかに区分すると、[1] 音声全般に関わる総論的なもの、[2] 母音に関するもの、[3] 子音に関するもの、に分けられる。以下、それぞれのトピックごとに受講者28名のうち何名が取りあげたかを示す。なお、受講者28名のうち、10人以上が共通して取りあげたトピックには下線を付すことにする。

#### [1] 音声全般に関わる総論的なもの

呼吸のしくみ(2人)、音声器官(1人)、有声音と無声音(0人)、母音と子音の定義(10人)、IPA(2人)、

#### [2] 母音に関するもの

母音を分類する時の3つの基準(3人)、基本母音図(8人)、精密表記と簡略表

記(2人)、緊張母音と弛緩母音(1人)、強母音と弱母音(4人)、短母音[6種類]の発音のコツ(10人)、短めの母音・長めの母音(2人)、長母音[5種類]の発音のコツ(5人)、『peak』と『pick』長さの違いと音色の違い(1人)、二重母音の定義(3人)、「愛」と『eye』(13人)、三重母音の定義(0人)、『fire / hour』(4人)、「ア」と/æ, a, ʌ/(2人)

### [3] 子音に関するもの

子音を分類する時の3つの基準(3人)、閉鎖音の定義(3人)、「ペン」と『pen』(12人)、/t, d, n/日英の違い(4人)、たたき音[r](3人)、「タイガー」と『tiger』(4人)、摩擦音の定義(6人)、日本語「フ」[ɸ]、/b/と/v/: 正しい調音の確認法(5人)、/θ/と/ð/(1人)、/s/, /ʃ/, [ç]「シ」(4人)、「ずっと」と『zoo』(2人)、/z/と/dz/(2人)、『cars』と『cards』(6人)、「ヒット」[ç]と『hit』(1人)、破裂音の定義(1人)、鼻音の定義(3人)、comfortの[ŋ](0人)、語末の'n' /n/(0人)、『sing』の/ŋ/発音練習法(1人)、『ng』は/ŋ/か/ŋg/か(1人)、明るい[ɪ]と暗い[ɪ̥](4人)、/l/と/r/([ɹ])(4人)、/r/([ɹ])音の発音のコツ(0人)、半母音の定義(0人)、『ear』と『year』(1人)、日本語の「ワ」[w](1人)、/h/音の脱落(1人)、『play』(/l/の無声化)(1人)

## 5. 1. 2 分析と考察

### [1] 「音声全般に関わる総論的なもの」について

「母音と子音の定義」を取りあげた受講者が10人(36%)いた。これは恐らく言語音について理解するための出発点としてまずは押さえておこうという姿勢の表われと考えられる。

「有声音と無声音」を取りあげた受講者が皆無なのは意外であった。声帯の振動の有無による違いということで、音声学としては重要な項目なのであるが、これは恐らく日本語の清音・濁音からの類推で感覚的に理解できるということで敢えて触れなかったものと考えられる。

### [2] 「母音に関するもの」について

短母音と長母音を比べた場合、長母音を取りあげた人が5人であるのに対し、短母音が10人であった。これは、講習では筆者の考案によるイメージ図を使って説明したり、比喩を交えて発音のコツを説明したことが受講者にとってインパクトがありそれだけ強く印象にも残ったことが背景にあると考えられる。

二重母音の項目で『eye』と「愛」の発音の違いについて触れた受講者が13名(46%)で全トピックの中で最も高かった。受講者自身の中では恐らく両者は同じ

であると思っていたものが実はそうではないということで「受講者にとっての意外性」というものが背後にあると考えられる。

このトピックのように、具体例を使って日本語と英語の違いを学ぶという場合は受講者の関心を寄せやすいのであるが、日本語とは切り離して英語内部での違いに関するトピックになると取りあげ者数は激減する。たとえば、緊張母音(tense)と弛緩母音(lax)の区別、すなわち、調音する際に口の中に張りがあるかないかは、英語を英語らしく発音する際に心得ておくべき非常に重要な項目なのであるが、これを取りあげた受講者はわずか1名に過ぎなかった。同種のことが「短めの母音・長めの母音」についても言える。これは、母音の後ろに無声子音が続く場合はその母音は短めに発音され、一方、有声子音が続く場合はその母音が長めに発音されるという内容なのであるが、これを取りあげた受講者はわずか2名であった。

### 〔3〕「子音に関するもの」について

子音についても、上記母音の場合と同様の傾向が見られた。すなわち、具体例を使って日本語のカタカナ語とそれに対応する英語の違いを学ぶという場合は受講者の関心を寄せやすいと考えられる。例えば、英語の気音(aspiration)がトピックとなる「ペン」[pen]と‘pen’ [p<sup>h</sup>en]はその好例で、受講者28名中12人(43%)が取りあげている。その一方で、「ヒット」[ç]と‘hit’の発音の注意点について触れた受講者はわずか1人であった。その背景には、授業の中で‘hit’の[h]音は声門で摩擦が生じるという説明を聞いてもピンと来ず、十分に消化し切れていない受講者が多いものと考えられる。

その一方で、子音についても、日本語とは切り離して英語内部での違いに関するトピックになると取りあげ者数は減少する。例えば、「‘ng’はŋかŋgか」というトピックはわずか1名だったのであるが、‘long’ /ŋ/, ‘finger’ /ŋg/, ‘longer’ /ŋg/, ‘singer’ /ŋ/の語群にみられるように、語形成や品詞と関連づけた理解が必要なトピックについては、その場では十分に消化し切れなかったものと思われる。また、‘lay’に対して‘play’では/l/が声に関する進行同化により無声化されるというトピックではわずか1名が取りあげたに過ぎず、‘comfort’の/m/音が調音位置に関する逆行同化により[m̥]音で発音されるというトピックについては皆無であった。音声学的な観点から受講者の知的関心を呼び起こすのはまだ少し時間がかかるようである。

## 5. 2 英語音声学 C に関する調査結果：分析と考察

英語音声学Cについては、受講者の関心およびその内容は驚くほど均質化しており、受講者33人中33人つまり全員が、4種類の強勢、つまり第1強勢・第2強勢・第3強勢・弱強勢に関する記述に加えて、ピッチとの関連性について言及していた。受講者たちにとってそれまでなんとなく英語音声の印象としてはつかんでいたことが、実はその背後に明確な規則があるということを知って、ある種の驚きを伴って受け止められたことがその振り返り記録から伝わってきた。ここではお二人の受講者の振り返り記録を紹介したい。

「一番印象に残っているのは [2→2→2→3→1] (のパターンについての話) である。何度考えたか? 何度書き込んだか? この2日間で、この基礎的な部分は理解できたように感じている。犬塚先生が講義中におっしゃっていた『他の教材を聞いてみるとこうなっているはず』(という言葉) を思い出し、家にある教材を昨夜聞いてみた。‘おっ! やっぱり!!’ と思ったことも、個人的に心に残った出来事である。」(A教諭)

「2日間、英語音声学Cを受講して、最も新しい発見は、声の高さ(pitch) に大原則があり、大半の構文や語の並びがそれに従って発音されているということです。これまで長い間、一度もこのようなpitchの共通性を意識したことはありませんでした。しかし、今まで学んできたことを振り返りながらこの2日間を通してみると、見事にこの規則性にあてはまっているという点に大変驚き、また納得させられました。nativeはこれらのことを意識せずとも体得し使っているのでしょうか、第二言語として英語を身に付ける場合は、このことを知っておくことが非常に大切なのだな、と思いました。」(B教諭)

## 6 結語

以上本稿では、岩手大学教育学部で実施された小学校教員対象の免許法認定講習において、筆者が平成29年度に担当した「英語音声学B」および平成30年度に担当した「英語音声学C」を通して見えてくる受講者たちの英語音声学トピックについての関心度を分析し、考察を加えてきた。

英語音声学は独学が困難な分野であり、しかも学習項目が多岐にわたるため、短期間の集中講義ですべての内容を網羅することは難しいのであるが、受講者の知的好奇心を引き寄せるための秘訣があるということに筆者は改めて気づいた。

英語音声学Bに関して言えば、日本語母語話者の視点から、日本語と英語の音声上の特徴やその違いを浮き彫りにしていくこと、その際、日本語になっているカタカナ語ともとの英語を比較対照の素材として活用すると効果的であること、である。また、英語音声学Cに関して言えば、これまで何となく感覚的な印象として受けとめていた英語音声の奥に実は明確な規則性があるということをしっかりと理解してもらうためには、書き込みドリル形式を併用した形での発音練習が効果的であるということである。いずれの場合も、受講者にとって「驚きと発見」につながる要素が盛り込まれており、その意味では、これからそれぞれの小学校で英語教育を担っていく現職教員の方々に英語音声学に関する一つの学修のきっかけを提供できたと考えている。

#### 参考文献

- 犬塚博彦 (2003) 「日英の音体系の違いを踏まえた英語子音の効果的な発音指導法について」, 『第29回全国英語教育学会南東北研究大会発表要綱』, 431-444.
- 犬塚博彦 (2018) 「小学校教員の英文法および英語学トピックへの関心度—平成29年度岩手大学免許法認定講習より—」, 『岩手大学英語教育論集』第20号, 35-43.
- 亀井孝他編. 『言語学大辞典第6巻 術語編』. 東京: 三省堂, 1996.
- 島岡丘 (1986) 『教室の英語音声学Q&A』, 東京: 研究社出版.
- 竹林滋 (1996) 『英語音声学』, 東京: 研究社.
- 竹林滋他 (2008) 『新装版 英語音声学入門』, 東京: 大修館書店.
- 日本音聲學會編 (1976) 『音聲學大辞典』, 東京: 三修社.
- Sheeler, Willard D. (1967a) *Stress and Intonation, Part 1*, New York: Macmillan Publishing.
- Sheeler, Willard D. (1967b) *Stress and Intonation, Part 2*, New York: Macmillan Publishing.

(岩手大学教育学部英語教育科)